

## 藤岡市南部の扇状地構成層における最終氷期終末期の花粉化石群集

田中 義文<sup>○</sup>・斉藤 崇人(パリノ・サーヴェイ株式会社)・井上 勉(藤岡市教育委員会)

藤岡南部遺跡は、矢場集落付近を扇頂とする扇状地上に立地する。本遺跡のトレンチや排水路断面では、As-YP を挟むシルト層や泥炭層が露出する。今回、藤岡市教育委員会の協力を得て、壁面ならびにボーリングにより試料を採取し、花粉分析により当時の古植生に関する検討を行った。確認された最下層は、灰色の中粒～粗粒砂である。その上には砂層が堆積するが、途中 AT と As-BP テフラを狭在する。その上位は、木本質泥炭層と砂層の互層となり、上部に As-Ok1 テフラ? が狭在する。その上位は、砂質シルト層が約 1m の層厚で堆積しており、上部に As-YP テフラが厚く堆積する(最大 30cm)。As-YP の上には砂～砂質シルト層が数十 cm 堆積しているが、3 地点では木本質泥炭層が発達し、厚いところで約 1m ある。

花粉分析の結果、山地縁辺部においては、最終氷期最寒冷期以降、最終氷期末まで植生に大きな変化はなく、マツ属、トウヒ属などの針葉樹林に覆われていたことが示唆される。関東の平野部では、AT 降灰直後はほとんどが針葉樹からなる組成を示すが、その後ハンノキ属などの広葉樹が増加する。今回の結果はこれとは逆に AT 降灰層準に比べ広葉樹花粉化石が減少する傾向にある。平野部では温暖化に伴い、谷内に沖積土が厚く堆積し、低地が拡大したため、ハンノキ属、ニレ属一ケヤキ属などからなる湿地林が分布拡大した。一方調査地付近では、堆積の中心域が移動したため、花粉化石群集が反映する植生の範囲が変化した。なお、各地で発見された埋没林の調査成果により、最終氷期にはトウヒ属は低地にも森林を構成していたと考えられているが、本地点でも同様であった可能性が高い。また、市内の北山 B 遺跡では、丘陵上からトウヒ属の炭化材とともにタケ亜科の植物珪酸体が検出されており(パリノ・サーヴェイ株式会社,1995)、山地縁辺部の針葉樹林は、林床にササが生育可能な疎林であった可能性がある。既存の成果による As-YP 降灰前後の変遷は、当初針葉樹を主体とする花粉化石群集であったが、As-YP 降灰以降、ナラ類が急増する傾向がみられる。また、前橋市の二宮千足遺跡や前橋泥炭層の結果をみると、ナラ類の増加の前に、一時的にカラマツ属が急増する。今回の結果をみると、As-YP 降灰以降も、針葉樹を主とした組成が続いており、カラマツ属の一時的増加やナラ類の急激な増加は認められない。カラマツの一時的な分布拡大は、前橋台地周辺の局地的なものと推測される。前橋泥炭層の As-YP 降灰からナラ類の急増までは、約 2000 年程度の間隔が存在する(辻・木越,1992)。今回分析を行った堆積物は、年代的にナラ類の急増期以前に相当すると思われるが、増加時期に違いがある可能性もあり、今後年代測定を行うなどして、明らかにしていきたいと考えている。

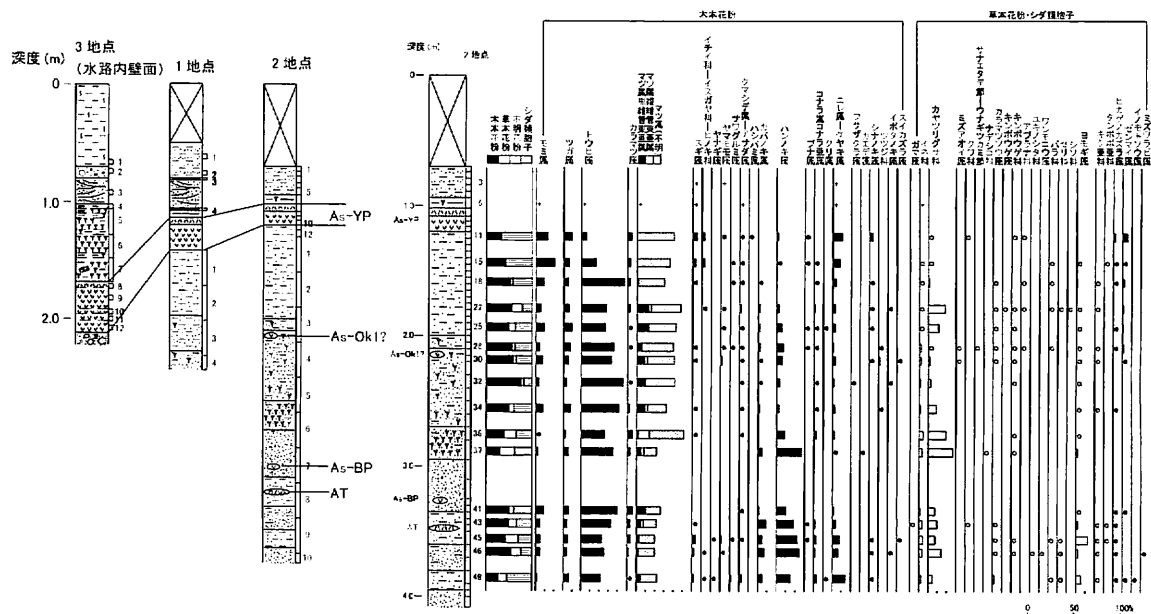


図 2 地点の花粉化石層位分布  
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。  
なお、●は 1%未満、+は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。